

地帯にあって、遺跡北端部は手取川扇状地南縁と接し、南端部は梯川沖積地との地形変換線上にある。東方約2kmにある能美丘陵上には、県内でも有数の能美古墳群があり、能美地域の有力支配層の黒世的な推移を示すもの

たかんどう

- 高堂遺跡は、小松市街地より北東へ約4kmの能美平野北端部に立地する。東に高く西に低い緩慢な傾斜をもつ標高約6mを測る水田

高堂遺跡の調査は、国道建設に伴う事前調査であり、一九七九年より三次にわたって調査が進められてきた。弥生時代終末期から室町時代の各時期にわたる複合遺跡であるが、とくに、平安時代前期に比定される遺構が際立っている。掘立柱建物跡や溝状遺構などの主要遺構をはじめ、多数の墨書土器、皇朝十二銭、木簡などが出土し、本遺跡の性格付けに問題を投じている。

67

さて、木簡が出土した遺構は、建物群の西側を画す南北溝である。上幅約一・五m前後、深さ約五〇cm前後を平均とし、二〇〇m以上にわたって直進している。この溝からは、「隆」「改吉」などの墨書土器が百数十点出土した他、曲物、横櫛などの木製品が多数出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ×□造 [宿女カ]

(125) × (14) × 5 019

(2) 「金光明寂勝王経四天王護国品

(515) × 28 × 5 019

木簡(1)は、南側建物跡群に近接する溝中の下層堆積土(平安初期)より出土し、木簡(2)は、それより北へ約四〇mの溝中より出土している。いずれも九世紀代に比定されるものである。(1)の第一文字は、「禾」偏が明瞭ではあるが、右半が欠損して読み取ることができない。下二字は「宿女」と読める可能性があり、人名を記したものと想定さ

れる。(2)は、上端を山形に尖らせたもので、下半部には文字は認められない。鎮護国家の根本聖典となった経題を示すものとして特筆される。本遺跡が、能美郡衙もしくは郡寺に付随する官衙跡である可能性も考えられることから、木簡(2)は、郡領層と国家儀容の係わりの一端を示すものとも考えられる。

9 関係文献

石川県立埋蔵文化財センター 『高堂遺跡―第1次・第2次発掘調査概報―』

一九八一年

同 『高堂遺跡―第Ⅲ次発掘調査概報―』 一九八二年

(戸淵幹夫)



←木簡(2)

↑木簡(1)
(原寸)